「萩市文化財保存活用地域計画（案）」に対するご意見の概要と市の考え方

ご意見の概要	市の考え方
「益田家文書」は、須佐益田家を中世から幕末までの萩の歴史・文化を物語る第一級の一次資料ですが、その所在は、益田家本家及び東京大学史料編纂所と萩市須佐歴史民俗資料館の 3 か所に保管されています。 萩市の歴史・文化財を観光資源と捉え、活用するという観点から、３か所に分散している「益田家文書」を萩市として調査研究して、一部を萩市に集約して、調査研究成果展を開催することを提案します。	益田家文書は中近世の大規模武家文書群として、高い史料的価値を有しています。とくに中世期の古文書においては、益田氏だけではなく近隣の有力国人（大内氏、毛利氏など）の関係とその変化を知る上で、萩市にとっても貴重なおたからです。しかしながら、現在、益田家文書のほぼすべてが東京大学史料編纂所に寄贈・寄託されており、本市に益田家文書を集約することは、現実的ではなく、なかなか有効な活用が見出せていません。 本計画では、こういった課題解決に向けて、未指定等文化財のおたから認定の推進や文化財調査事業を文化財保存活用の措置に位置付け、その価値を研究機関と連携し、明確化するとともに、第４章における「萩ものがたり」（関連文化財群）として、須佐と益田家をテーマとしたストーリの発見等の可能性も見据えながら進めて参ります。
大井円光寺古墳からは、勾玉や環頭太刀柄頭などの出土品が発掘されています。これらの遺物・出土品から、大井がこの時代の阿武国の中心地であり、ヤマト王権との強いつながりがあったと推測できます。 古墳時代から中世に至る時代の萩地域に残る遺物・文化財について、当時の日本及び山口県内の中での位置づけを整理するなど、更なる調査研究と情報発信することを提案します	萩市の歴史文化の特性として、これまで、毛利氏の開いた近世城下町の遺産と幕末明治維新関連遺産が顕著で、これを観光資源として活用してきて来ましたが、近世以前の古代・中世の貴重な文化財も本市には多く保存されています。しかし、その認知度は高くなく、活用も進んでいません。また、調査や整備に関する専門人材の不足等の課題もあります。 本計画案では、第４章において、古代・中世の関連文化財群を「千年を超えて続く阿武―萩藩成立以前の萩の世界―」と題し、地

	域の特色ある「萩ものがたり」として位置付け、保存活用に努めて参ります。具体的には、専門人材を確保し、文化財調査事業により更なる価値評価を進め、モニタリング事業により良好な保全環境を維持し、適切な保存整備事業を行って参ります。また、可視化の難しい遺産についてはＶＲ等を用いた復元等の手法も含め研究して参ります。